

Invited Article

認知的完結欲求の観点から見たコロナワクチン関連の陰謀論の分析

池田亘孝*

Abstract

陰謀論は現在でも多くの人に信じられており、人々の行動に影響を与える陰ものも存在する。個人が陰謀論に陥るメカニズムとしては自然選択・感情コントロールの喪失・認知的負荷などが知られているが、「より明確な説明により曖昧さを排除したい」という認知的完結欲求は個人内で陰謀論が形成される過程を知るのにより適切なメカニズムであると考えられる。本稿では認知的完結欲求を元に、ポパーの反証主義を満たす形で定義された陰謀論の形成過程を分析し、その分析から導きだれる陰謀論の解決手段を提示した。陰謀論の元となる信念は個人の不安や不信感を説明するように形成され、反駁の機能を持つ検証例が反駁の形式のみを有する検証例へと変質することにより反証可能性を失っていき安定化する。安定化した信念の元で、反駁の形式を持つ検証例が多数現れることは反駁を主張する主体と目的の存在により明確に説明される。このような陰謀論的思考が、集団内で共有され広まっていくことにより陰謀論者が増加すると考えられる。対策として、リラクゼーションや安心できるコミュニケーションの確立により不安や不信感を取り除くこと、幼少期に適切な権威主義を導入し段々と反証主義や完全性の否定といった権威主義を取り入れるような環境や教育を整備すること、早めの情報共有や妥当な説明の提示を行うことなどが挙げられる。

キーワード：陰謀論、認知的完結欲求、反証主義、コロナワクチン

Conspiracy theories prevail in modern society and affect human actions. Some of the proposed mechanisms people get into conspiracy theories are natural selection, loss of emotional control, and cognitive burden. Here I introduce the need for cognitive closure, one of the human tendencies to run away from vague ideas and jump to explicit conclusions, as a way to explain the process in which conspiracy theories prosper in individuals and clusters. The primitive belief is formed to explain anxiety and disbelief in the individual and makes falsifications lose their function to rebut. On the existence of the belief stabilized as such, falsifications in the world are most clearly explained by a certain group of people, with a certain purpose, trying to rebut the belief. Those ideas are shared in the clusters, and more and more people lean toward certain conspiracy theories. Bearing those mechanisms in mind, there are some ways to resist to conspiracy theories: relaxation and communication as a way of levitating anxiety and disbelief; introducing appropriate authoritarianism, especially science in the youth and succeeding falsificationism; sharing

* 東京大学医学部医学科

E-mail: nobu08081184739@gmail.com

appropriate information and persuading explanation immediately via mass media.

Keywords: Conspiracy theory, need for cognitive closure, falsifications, Covid-19 vaccine

1. 序文

陰謀論は世界中に遍く存在している¹。ごく一部にのみ知られているものに限らず、「ジョン・F・ケネディ暗殺はCIAが関与していた」など、昔から世界的に知られている陰謀論も多い²。このような陰謀論の登場は21世紀に入っても続き、多くの賛同者を得ているものも含まれている。例えば2004年でのニューヨークでは49%が「アメリカ政府は事前に2001年のアメリカ同時多発テロの存在を把握していたが対策を取らなかった」という陰謀論に賛成を表明している。特に21世紀に急速に普及したインターネットやSNSは陰謀論の巣窟として機能している。

このような陰謀論は単なる話題となるだけではなく、医学に関する信頼感や実際の行動にも影響を与えている。アメリカ人の37%が「FDAは製薬会社からの圧力のためにがんや他の疾患に対する自然療法の情報を人々が得ることを故意に妨げている」と信じていることは、医学に関する不信感の存在を明確に示唆している³。また、アメリカ人の20%が小児用ワクチンと自閉症の関連について信じており⁴、子供にワクチンを接種させないなど具体的な行為に繋がることもある⁵。このように思想・行動にまで多大な影響を与える陰謀論についての議論は人々の生活が脅かされることを防ぐために重要であると考えられる。

陰謀論に個人が陥るメカニズムについては様々な説が提唱されてきた。進化論的には、古代社会において一部の人が結託し争いを起こすことによる死亡が多かったため、結託者を見つけ出そうとする方向に自然選択が働いたとされる⁶。また、

感情のコントロール喪失により実際には存在しないパターンを認識してしまう人間の性質に陰謀論が起因するとする説がある⁷。また、認知的負荷がかかるとより効率的な処理のためステレオタイプを形成するようになることが陰謀論に関連するとの説もある⁸。このような説明は確かに陰謀論が個人に取り入れられる理由を説明しているが、その具体的な過程についての説明に乏しかった。

一方、KruglanskiとWebsterが提唱した認知的完結欲求とは、明確な結論（あるいは説明）を求め曖昧さを避けようとする人間の傾向である⁹。認知的完結欲求は陰謀論に通じるとされており¹⁰、個人がいかなる状態にあってもその後個人の理解の方向性を記述できる。そのため認知的完結欲求を陰謀論形成初期から順に適用することにより、他のメカニズムを適用した場合と異なり陰謀論の形成過程を分析することが可能である。

以上を踏まえ本稿では、陰謀論が個人の内部で形成される具体的な過程について認知的完結欲求の観点から説明を試みる。また、その分析をもとに陰謀論に抵抗する方法を提案する。特に近年広まってきたコロナワクチンに関する陰謀論¹¹を議論のテーマとした。

2. 陰謀論の定義

陰謀論は様々な形式により定義されてきた。Douglasによれば陰謀論は「社会的・政治的に大きな出来事・状況の究極的な原因を、2つ以上の強力な活動団体により秘密裏に計画されたと主張し説明しようとする試み」である¹²。また、Uscinskiは「出来事の主要因を、自身の利益のために公

共の利益に反し秘密裏に行動する小規模の団体に
帰するとする説明」と記述している¹³。

本稿では、下記の5条件を満たすものを陰謀論
と定義する。

C1: 社会的な事象が対象であること

「社会的な事象」とは、その存在が(真偽に
よらず)新聞やテレビなどの複数のマスメ
ディアにより報道されている事象を指す。

C2: 公式な見解と反する主張であること

「公式な見解」とは、その分野における専
門家とされる人々や機関により暫定的な見
解とされたものである。

C3: 主張内に、事象の背景としてその原因たる
活動団体の存在が示唆されていること

C4: 主張がある集団内で共有されていること

主張の共有とは、文章や会話を媒介として
ある人間の主張が他の人間に(一方向ある
いは双方向に)伝達された結果として同じ
主張を行う状態を指す。

C5: 反証主義に反すること

ポパーが科学的言明の基準として初めて明確に
記述した反証主義は「検証例により反駁可能でな
いものは科学的ではない」と要約される¹⁴。一般
的には、経験の積み重ねから信念が形成される。

この信念は新たな根拠により強化・減弱される。
また、一度信念を強化した根拠が後に偽であると
判明すれば信念は減弱する。図1の具体例では、
複数のカラオケ店が儲かっているという具体例か
らカラオケ店が儲かるという信念が形成され、そ
の信念は新たな根拠により強化・減弱される。

一方、ポパーによれば人間が世界に規則性を見
出そうとする性質はアプリアリである。この際、
演繹的に信念を発明するのであって、経験は信念
の検証に用いられるのみである。そのため、信念
が真であることを示す検証例が存在する場合も、
その検証例が否定された場合も、信念自体は変化
しない。一方、経験が信念と矛盾する検証例であ
る場合、この検証例は反駁として機能しうる。図1
の具体例においても、カラオケ店が儲かるという
信念はアプリアリに形成され、特定のカラオケ店
が儲かっていることは単なる検証例であり信念を
変化させない。信念を変化させるのは、あるカラ
オケ店が儲かっていないという検証例による反駁
のみである。

このような検証例により反駁されるリスクが高く、
さらに現在まで反証されていないような信念が暫
定的な理論とされる。例えば「ボールの落下速度
は神により決められている」という理論は反証不
可能であり科学的言明ではない。

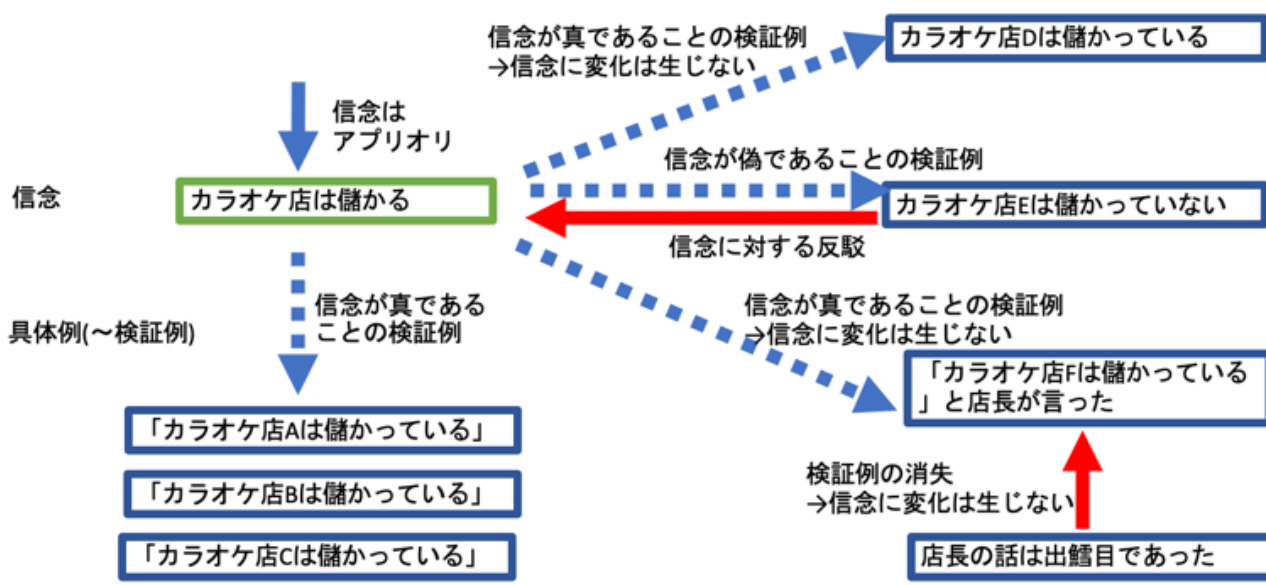
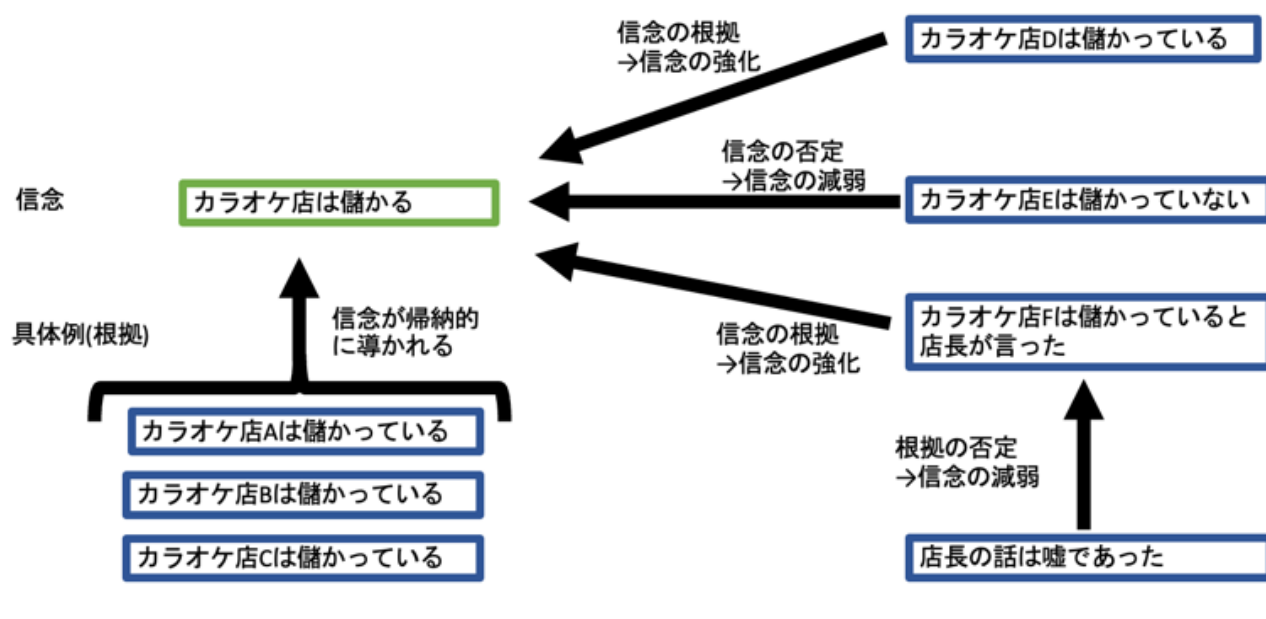


図1 一般的な信念（上）とポパーによる信念（下）

一般的には信念が具体例より帰納的に導かれ、新たな具体例により信念は強化・減弱する。一方ポパーの定義では、信念の検証例としてのみ具体例は働く。信念を変化させうるのは、信念に対する反駁として機能する検証例のみである。

緑枠：信念 青枠：検証例 赤矢印：反駁 青・黒矢印：直接的な影響 青破線矢印：信念と検証例の関係

3. 認知的完結欲求と反証主義の関係

ポパーの反証主義に照らし合わせれば、信念が真であることの検証例が存在するとき、信念は検証例に対する明確な説明となる。一方、検証例が信念に反駁するとき、信念は検証例に対する明確な説明になっていない。信念が検証例によって反

駁されている場合、信念は置換されうるが、認知的完結欲求に基づけばこれは検証例を明確に説明するような方向への置換である。図2の具体例において、「カラオケ店は儲かっている」という信念は検証例によって反駁されているため、検証例との不適合性が少ない信念に置換される。

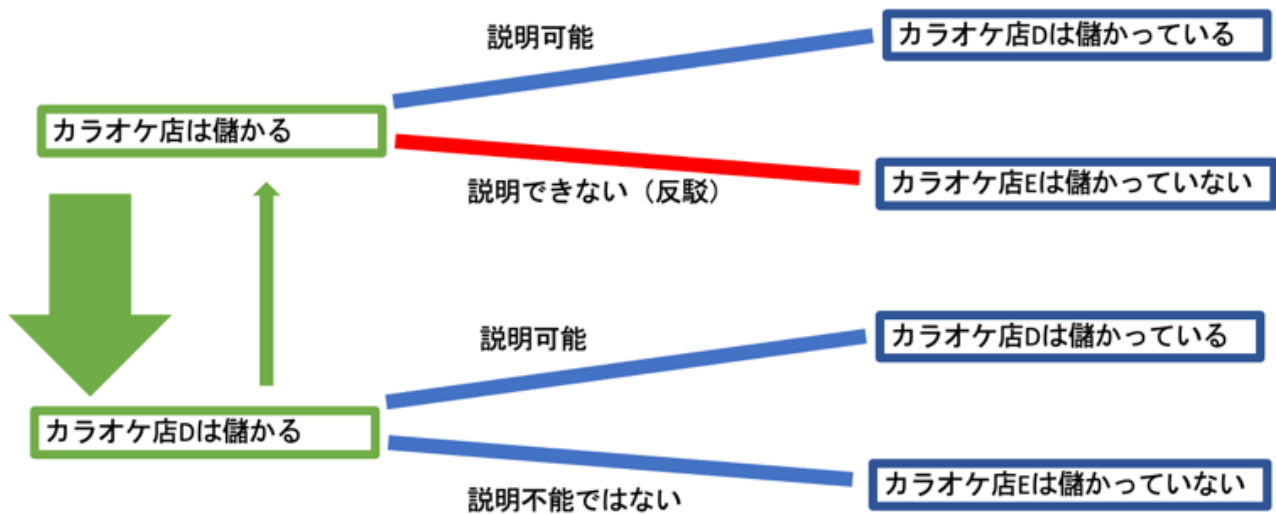


図2 認知的完結欲求

認知的完結欲求に基づけば、検証例が反駁となるような信念は検証例が反駁とならないような信念へと向かっていく。

青枠：検証例 緑枠：信念 青線：明確に説明可能な関係 赤線：明確な説明ができない関係

緑矢印：変化の方向

4. コロナワクチン関連の陰謀論について

コロナワクチンの議論の争点として経済面（企業や関係者の利益）、政策・法律面（ワクチン接種の運用方法）、人体への影響の3つが挙げられる。本章では、命題「コロナワクチンは危険である（P）」を軸に、コロナワクチン関連の陰謀論について「信念の形成」「信念の安定化」「陰謀論の萌芽」「陰謀論の形成」の4フェーズに分類し認知的完結欲求の視点から分析を試みる。

4.1 信念の形成

現状についてある人が「明確に説明されていない」と感じるとき、認知的完結欲求に従い明確な説明が希求される。この欲求は直接、間接の2種類の経路を有する（図3）。

4.1.1 信念の直接的形成

コロナワクチン自体に不安を抱く人Aは直接的に明確な説明を求める。

「コロナワクチンは危険である（P）」という言明は、「コロナワクチンが危険であったから不安が生じたのだ」という解釈を介して自身の不安の原因を明確に説明する。つまりPはAの設定した信念となる。

「コロナワクチンは安全である（P'）」という言明が何度繰り返されても自身の不安を解消しない場合、P'はAの信念とならない。Aは不安に対する説明を求め続け、Pという言明に触れれば（場合によっては一度であっても）言明Pは明確な説明として自身の信念に設定される。

一方言明P'を受けコロナワクチンへの不安が解消される場合、P'がAの設定した信念になり、この場合陰謀論の求心力から逃れることになる。

4.1.2 信念の間接的形成

間接的な経路として、コロナワクチン自体には不安を抱いていないが、政府・企業・自治体・病院などコロナワクチンに関連する団体に不信感を持っている例が挙げられる。「信頼できない団体の推奨するコロナワクチンは安全である」という言明と比較して、「信頼できない団体の推奨するコロナワクチンは危険である」という言明は不信感を抱く状況をより明確に説明する。このようにして、コロナワクチン以外に対する不信感が間接的にコロナワクチンに関する信念Pを設定する。

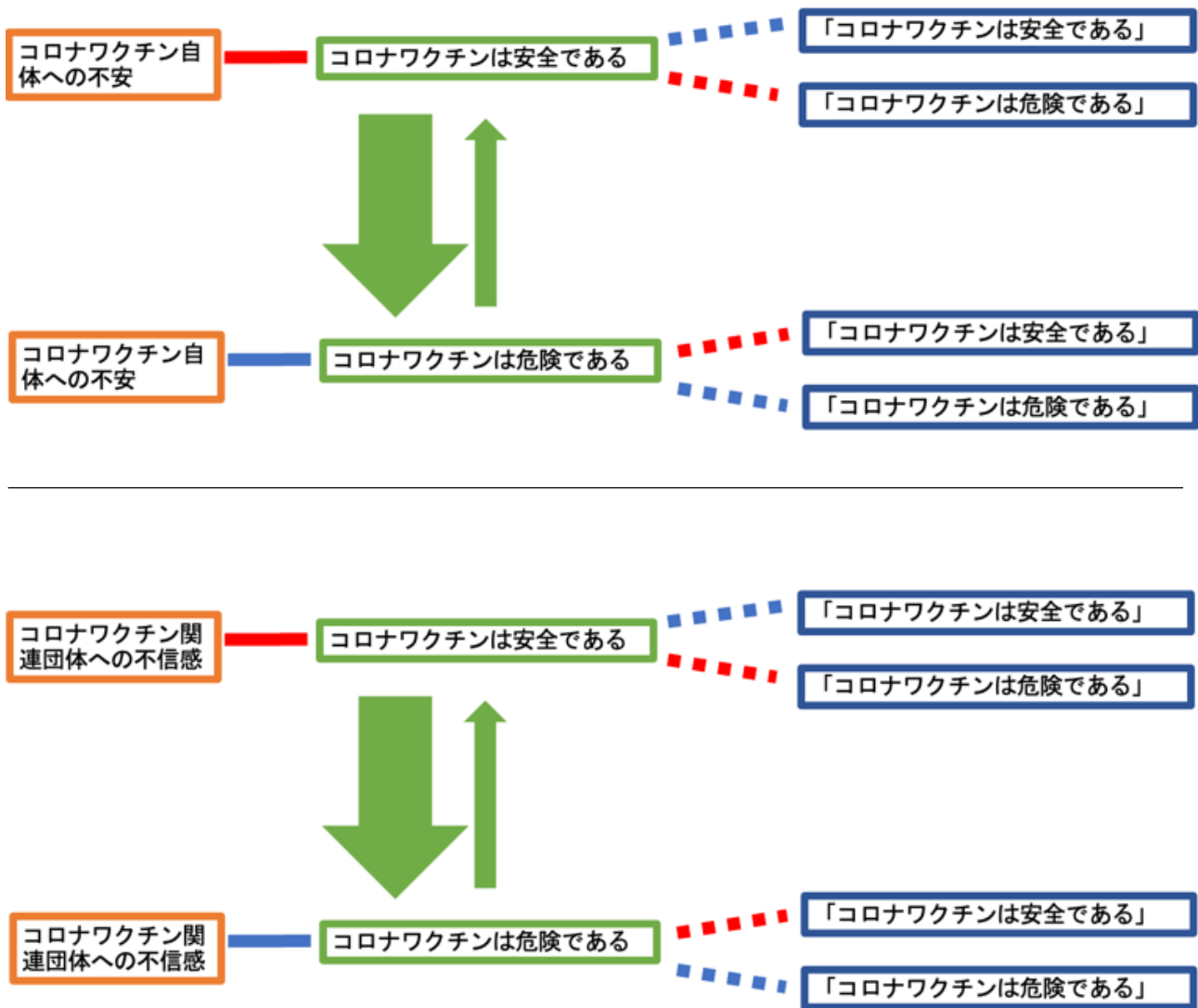


図3 信念の形成（上：直接路 下：間接路）

認知的完結欲求に基づけば、検証例が反駁となるような信念は検証例が反駁とならないような信念へと向かっていく。

青枠：検証例 緑枠：信念 青線：明確に説明可能な関係 赤線：明確な説明ができない関係

緑矢印：変化の方向

4.2 信念の安定化

明確な説明への欲求を満たす形で信念が形成された場合、その信念は安定化する。ここで信念が安定になる過程は信念が反証可能性を失っていく過程と対応する。信念 P を有する人に提示された 2 つの検証を例に説明する (図 4)。

4.2.1 検証例の否定と信念の関係性

コロナワクチンの接種が始まった時期に、「コロナワクチンは mRNA ワクチンであるため遺伝情報を書き換える (P₁)」という擬似科学が話題となった。P₁ は信念 P が真であることを示す検証例である。厚生労働省は「コロナワクチンは mRNA ワクチンであるが、RNA は人体の DNA を置き換えることはない」という科学的な根拠を示し¹⁵、P₁ は陰りを見せた。ただし、ポパーの反証主義に基づけば P₁ の否定は信念 P の検証例が一つ消失したことのみに意味し、それ自体は P の反駁として機能しないため、信念 P に影響を及ぼさず、それゆえ他の形式での擬似科学の出現も抑制しない。

4.2.2 反駁の機能の消失

「コロナワクチンには効果がない/コロナワクチンには副作用があり死亡者も出ている (P₂)」とい

う言明は SNS で散見され、信念 P が真であることを示す検証例である。一方、コロナワクチン接種群が未接種群より Covid-19 関連の死亡率が有意に低い¹⁶ という科学的根拠 G₁ は信念 P に対して反駁の形式を有する検証であった。検証 G₁ によりコロナワクチンへの不安が解消されない場合、信念 P を棄却することは現状の明確な説明が不能になる点で認知的完結欲求に反する。その結果、信念 P は維持される。「私にはコロナワクチンが効かなかった」「コロナワクチンで死亡した人がいる」など P₂ に付随するあらゆる言明は信念 P が真であることを示す検証例であり続ける。一方、検証 G₁ が反駁として機能せず反駁の形式のみを有する検証へと変質することにより、G₁ の存在下で信念 P が明確に説明できる状況が維持される。

換言すれば、解消されない不安の明確な説明として設定された信念 P は、P を反駁する機能を有している検証 G が加えられる度に、検証 G の反駁機能が失われて反駁の形式のみが残存し、逆説的に反証可能性を失っていく。

一方、検証 G が反駁の機能を持ちかつコロナワクチンへの不安を解消する場合、信念 P に対する反駁として機能し、信念 P が反証され陰謀論の求心力から逃れることができる。

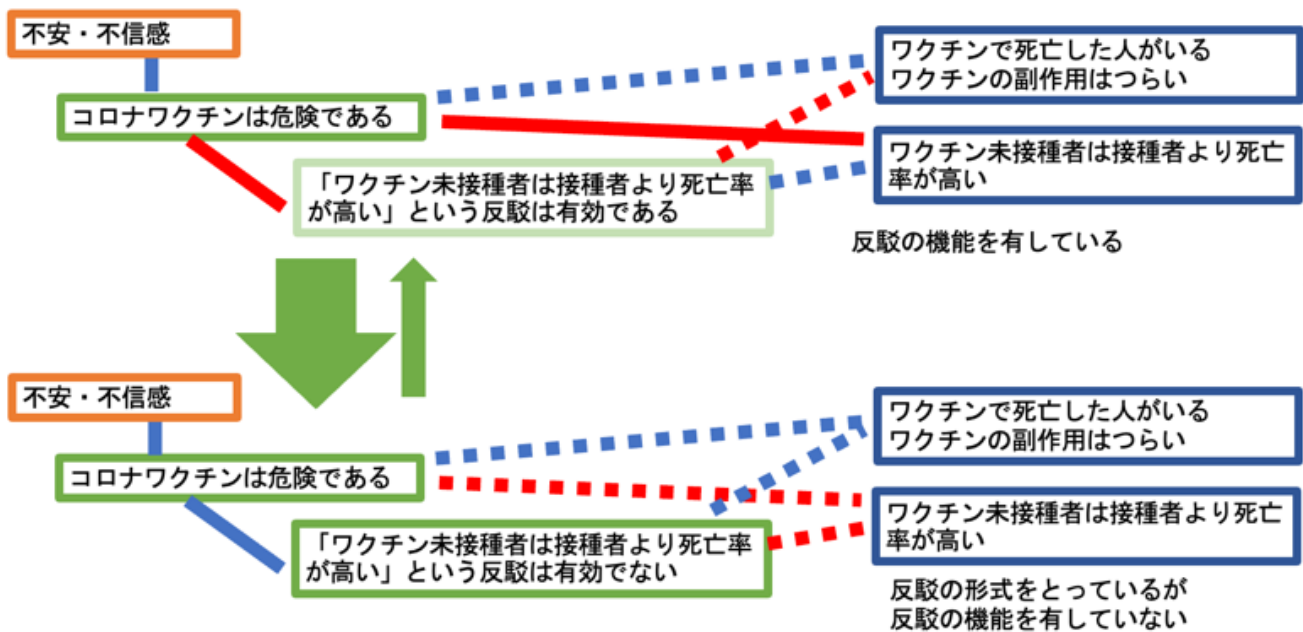
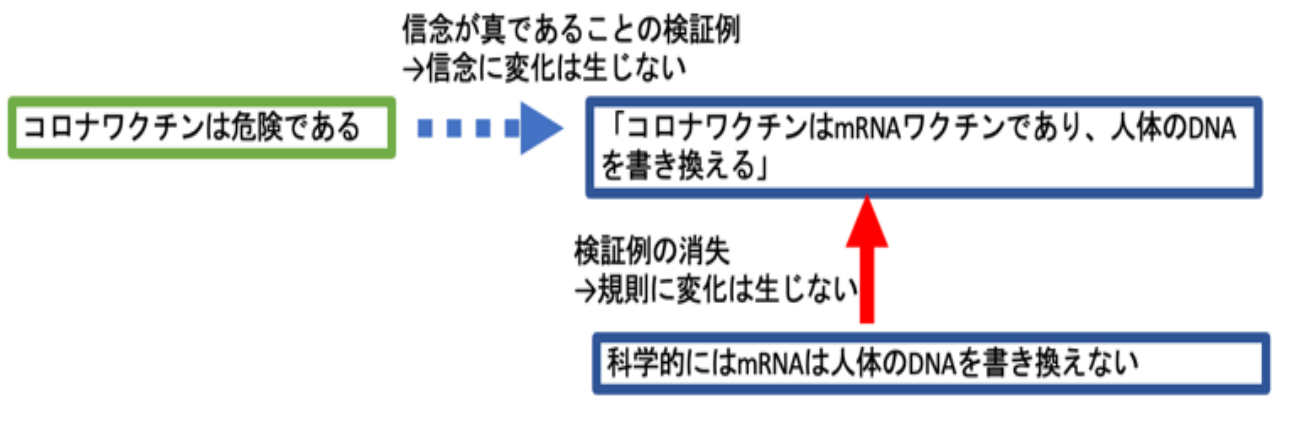


図4 信念の安定（上：検証例の消失 下：検証例の解釈変化）

信念が真であるという検証例の否定は、検証例の消失のみを意味し、信念に対し影響を及ぼさない。信念が検証例により反駁されている場合でも、信念が不安感・不信心と結びついたものであるならば信念が変更するとは限らない。その場合、「検証例による反駁が有効でない」という信念が形成されれば、反駁の機能を有していた検証例は反駁の形式のみを保存し信念を反駁させる機能を失うこととなる。こうして反証可能性が減少していき、信念は安定化していく。

橙枠：不安・不信心など根源的信念 緑枠：信念（濃色であるほど安定） 青枠：検証例
青線：明確な説明可能な関係 赤線：明確な説明不能の関係 実線：直接的な関係
点線：信念と検証例の関係 緑矢印：変化の方向

4.3 陰謀論の萌芽

すでに信念 P は安定化しているとしよう。このとき、信念 P 自体は明確に説明されている一方で、反駁の形式をもつあらゆる検証 G はその存在が明確に説明できない。当然の事実に対しなぜ反駁の形式を持つ検証 G が存在するのだろうか、という疑問は、さまざまな G が認識され検証に加わるほど大きなものとなり、その状態を明確に説明する必要性が生じる。

この状況に対し明確さを担保するための2種の応答が考えられる。単純な応答は反駁の形式をもつ検証の矮小化であり、このとき信念は反証可能性を限りなく失い完全に固定化される。検証の矮小化が起こらない場合、反駁の形式を持つ検証は出現し続けることとなり、「確実な信念に反駁の形式を持つ検証 G が生じる理由」を明確に説明しようとする複雑な応答が起こる。その検証 G の出現はその断続性ゆえ偶然ではなく必然に生じたとみなされ、その必然性ゆえ確実な信念に対し影響を与えようとする永続的な力の存在が推定される。永続的な力はその力の行使者 X の存在により最も明確に説明される。かくして信念に反駁を試みる

主体 X が存在することとなり、X による反駁の試みそれ自体が合目的性を体現している。具体的には、「ある主体 X は目的 O のために「コロナワクチンが危険である」という確実な信念に反駁する」という補助信念 $Q(X,O)$ が生まれる (図5)。補助信念 Q は検証から帰納的に導かれたものではなく発明されたものであるため主体 X や目的 O は恣意的である (任意の X,O について成立しうる)。この補助信念 Q は陰謀論の萌芽である。

X と O の恣意性により、ある X,O について Q が反証された場合も別の X,O について Q が設定される。言い換えれば、一度芽生えた陰謀論の萌芽は消滅しない。

このような補助信念 Q を有するある個人 A_1 において、ある X,O が存在し、Q が安定化しうる。現実には「ワクチン製造会社は莫大な利益を得るために「ワクチンが危険である」という確実な信念に反駁する」などの補助信念が対応する。 A_1 は Q が真であることの検証例だけを明確に説明できることに加え、(P から Q が形成された過程と同様)Q に反駁の形式を持つ検証に対する明確な説明 R を持ち、R も Q と同様恣意的である。

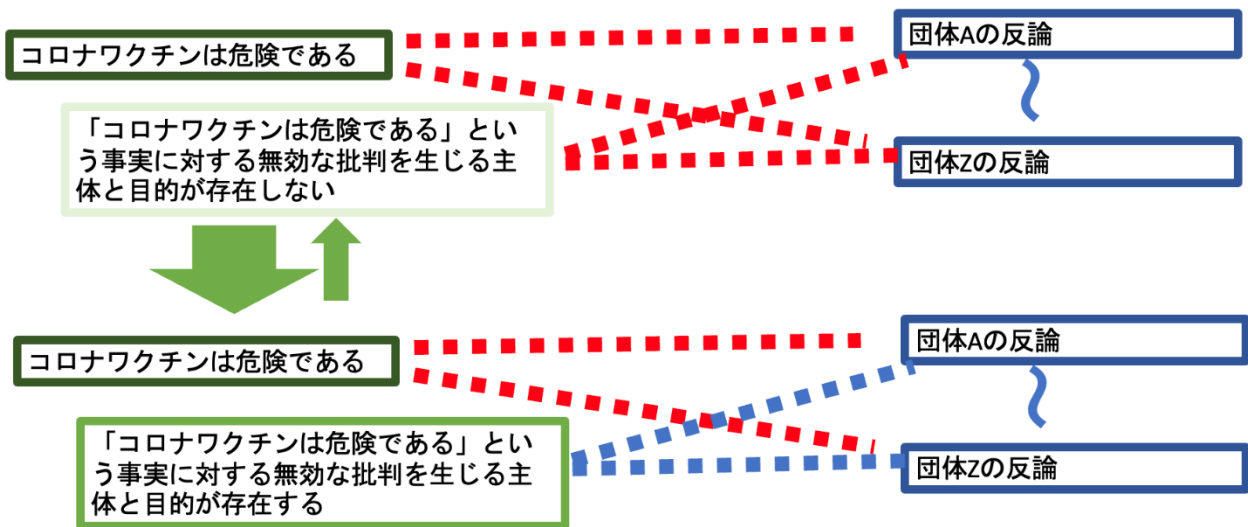


図5 陰謀論の萌芽

「コロナワクチンは危険である」という信念が安定化した人にとって、多くの反論が生じるという状態は、ある主体がある目的により反論を行っていると考えerことで明確に説明可能である。このような信念の形成は認知的完結欲求に従う。

緑枠：信念（濃色であるほど安定） 青枠：検証例 青線：明確な説明可能な関係

赤線：明確な説明不能の関係 点線：信念と検証例の関係 緑矢印：変化の方向

4.4 陰謀論の形成

陰謀論は 4.1～4.3 の個人内での過程をベースに、集団内では以下のように形成される (図 6)。

- 1) コロナワクチン接種に関する情報がマスメディアにおいて報道され、社会的な事象になる (C1)。特に、公式な見解においてワクチンの有用性が示される。
- 2) ワクチンへの不安や、関連団体への不信感を持つ人が「ワクチンは危険である」という言明に触れることにより、その言明は信念となり、その言明が再発信されることによりその言明を信念とする人が増加していく。
- 3) 科学的根拠により「ワクチンは危険である」という信念が反証されない場合、反駁の機能が失われていき信念が固定化する (C2)。
- 4) 信念が固定化した人は信念の反駁の存在に対する明確な説明を求める。補助信念 Q (C3) の安定化した A_1 と密接であるとき、補助信念 Q と説明 R が取り入れられる。説明 R の存在により Q は反証されず、結果として安定化する (C5)。この繰り返しにより Q を補助信念とする人が増加していく (C4)。
- 5) 補助信念 Q は、陰謀論の 5 条件 C1 から C5 を全て満たす。

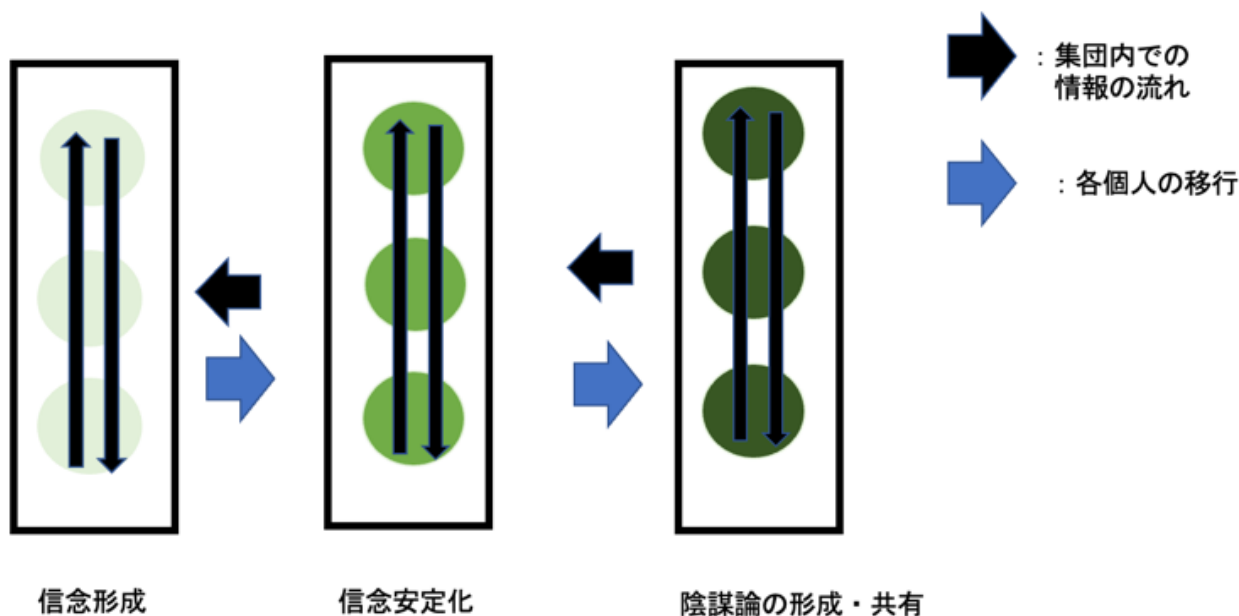


図 5 陰謀論の形成

「信念を形成した集団」「信念が安定化した集団」「陰謀論を形成した集団」は、集団内の情報共有、あるいは陰謀論に傾倒した集団からの情報により、さらに陰謀論へと傾倒していく。かくして陰謀論を語る集団の規模が拡大していく。

四角：集団 丸：個人（緑が濃色であるほど信念が安定）

5. コロナワクチン陰謀論への抵抗

本稿では認知的完結欲求に従い陰謀論の形成過程を説明した。この形成過程に基づき、陰謀論への介入について議論していく。ただし、これらの介入に抵抗性をもつ人がより陰謀論に陥りやすいというバイアスがあり、必ずしも陰謀論に抵抗する介入として適切であるとは限らない点に注意が必要である。

5.1 個人的要因への介入

一度安定化した信念は反証可能性を失う。そのため、陰謀論につながる信念が安定化する前の段階への介入が肝要である。

5.1.1 不安・不信感への直接的介入

不安や不信感といった普遍的な感情を説明しようという試みは認知的完結欲求に従う極めて自然なものである一方で、その欲求に従えば陰謀論の根源となる説明が信念となり安定化する可能性を孕んでいる。不安や不信感に適切に介入しその解消あるいは妥当な説明に努めることは陰謀論に対する抵抗につながる。

不安・不信感が認知よりも根源的なものであるとき、これを解消しようとする試みが有用となる。幼少期における身体的接触は安心感につながり、心理的接触（コミュニケーションなど）は社会的理解につながるとされている¹⁷。これは信頼できる地盤を自身の外部に獲得することにより不安・不信感が解消されることを意味しており、このアプローチが有効である可能性を示している。実際、リラクゼーションや瞑想は不安の改善に役立つこと¹⁸や身体活動は不安や抑うつを軽減する効果があることが知られており¹⁹、個人を対象とした陰謀論への介入として考慮される。また、会話を通

して安心感を獲得する方法として冗談を言い合うことなどが有用であるとされている²⁰。

5.1.2 認知面での介入

信念 P の安定化を妨げるためには、P の形成を妨げるか P を反証する必要がある。P が形成されない場合、P が信念となることにより状況に対する明確な説明が生じないような上位信念 P_{prime} が存在する（つまり P_{prime} の元で P は演繹されない）。また、一度は信念となった P が反証される場合も、検証に反駁の機能を与える上位信念 P_{prime} が必要となる。つまり、適切な P_{prime} が信念であれば陰謀論に対する抵抗性を有する。

上位信念 P_{prime} は任意に設定されるが、本稿では「権威主義」「反証主義」「完全性の否定」を取り上げる。これらの P_{prime} は「教育により妥当な P_{prime} が初期から設定されるようにする」「教育、経験の過程において初期の P_{prime} よりも現状を明確に説明するように妥当な P_{prime} を誘導し置換する」という形式で設定されうる。

i) 権威主義

権威が妥当であるという上位信念 P_{prime} の元で、権威 X が妥当であるとする規則 P_x が得られているとする。その際、X が陰謀論につながる信念に反駁する機能を持つならば、陰謀論への抵抗性を有しているといえる。コロナワクチンの例では、「WHO の見解は正しい」「政府の見解は正しい」「医者の見解は正しい」などが権威主義 P_x に対応する。これらの P_x は現実でも作用しており、陰謀論が蔓延しない一因として「公式の見解」という権威の存在は役割を果たしていると言えよう。一方で、権威主義 P_{prime} は信念形成、信念安定化どちらの過程においても陰謀論を加速させうる。

i-1) 信念形成

権威主義 P_{prime} に従う人は、 P_x により明確に説明されない状況において、現状を明確に説明する権威 Y を求め P_y を信念として設定する。信念 P_y が陰謀論に与するものであれば、即座に権威主義 P_{prime} は陰謀論への抵抗性を失う。

i-2) 信念安定化

信念 P_y に反駁を試みる検証例が権威 Z によるものであるとしよう。 P_y は明確な説明のために設定された信念であるがゆえ $P_{\text{prime}}-P_y$ は現状を明確に説明し、一方 $P_{\text{prime}}-P_z$ は現状を明確に説明しない。4.2 の議論を繰り返すことにより、 P_y に反駁の可能性を有していたあらゆる権威による主張 P_z は矮小化されるか「何らかの理由で正当な P_y に反駁しなければならないある集団が存在する」として解釈される。結果として P_y は反証可能性を失い安定化する。

ii) 反証主義

反証主義が P_{prime} であれば、その定義より任意の信念は完全に安定化し得ない。これは安定化した信念の上に成立する陰謀論への抵抗を示している。

反証主義への批判として、論理的には P_{prime} は自身の反証を構成できないため自身に矛盾することが挙げられる。一方、信念を運用の目的に限定すれば P_{prime} は上位信念として成立しうる。

iii) 完全性の否定

全ての現象に対し明確な説明を求めるのは認知的完結欲求に従い自然な現象である。一方で、 P_{prime} として「全ての現象に対し明確な説明が得られるのは不自然である（現実には偶然性が多分に関与

する)」が設定されていれば、本稿のような認知的完結欲求の反復により陰謀論に陥りあらゆる事象が明確に説明されるようになる過程それ自体を明確に説明することができなくなり、陰謀論からの脱却に至る。

iv) 権威の適切な設定

i)~iii)を踏まえ、上位信念 P_{prime} の一例を設定する。権威主義は扱いやすい手段である一方で権威に対する失望から陰謀論に陥る危険性が高まる。一方、反証主義や完全性の否定は陰謀論に直接対抗しうる一方で、権威主義より複雑なためより扱いにくい手段であるほか、最初に形成された信念 P によっては社会的に適切・許容される考えの範囲に至るまで十分長い時間がかかってしまう可能性がある。教育としては、幼少期に適切な権威主義を取り入れスタートラインを適切に設定した上で、徐々に反証主義や完全性の否定に移っていくことが望ましい。反証主義は科学的な考えと、完全性の否定は科学・統計学的な考えと密接に結びついているため、幼少期の間に自然科学と触れ合っていることが陰謀論に対する強力な抑止力になると考えられる。

5.2 集団的要因への介入

陰謀論形成の背景となりうる不安・不信感には社会的な要因に帰するものが含まれる。例えば人種差別は陰謀論と関連がある²¹ことが示されており、現在の社会に対する不安・不信感を反映していると言えよう。この意味では、より不平等を是正した社会に向かうほど陰謀論が生じにくいと考えられる。一方で、システム正当化理論において人間は現在存在する社会システムに安心感を抱くとされており²²、これは裏返せば社会システムの

変化に際して不安を生じることを意味する。さらに、一部の人は不確実性を抱える現行の社会システムあるいは社会システムの変更に対抗し、明確な説明を加え安心感を得るために陰謀論を唱えることがある²³（これはまさに認知的完結欲求に従っている）。つまり完全たる社会が現実には存在しない以上、変化の有無に関わらず陰謀論の出現は避けられない。

さらに、4.2 で示した通り、反駁の形式を持つ検証はある段階までは陰謀論の反駁として機能するが、臨界点を超えると陰謀論を支持する検証として機能することになる。以下では、「公式の見解を有する集団 α 」、「臨界点を超えていない集団 β 」、「臨界点を超えていない集団 γ 」に対して有効な介入を提示する。

i) 集団 α への介入

集団 α が集団 β の信念を取り入れないためには、集団 α に明確な説明を提示すること、および集団 β の信念が明確に説明不能であることを示すことが有効である。集団 α に対する明確な説明はただ用意・公表されるのみならず、その情報の速やかな開示が求められる。情報の開示が遅れ集団 β の信念により現状が説明されるようになった後では、開示された情報は反駁の機能を失い信念の安定化につながる恐れがあるからである。

さらに、集団 α が集団 β ・集団 γ よりも他の（適切な）集団からより多くの情報を得るために、教育やマスメディアを利用することが考えられる。

ii) 集団 β への介入

陰謀論に抵抗するためには、集団 β から集団 γ への移行を防ぐことが介入の一手段となる。ここで集団 α から集団 β への単なる攻撃は効果を上げ

ないことが多い。実際多くの報道や SNS などは、2つの陣営が自身の擁護と相手への攻撃のみに留まり水掛論に陥っている。このような状況においては、自身の信念として反証主義を有する一部の人を除き、どの陣営の信念も置換し得ない。集団 β に対しては、反駁だけでなく現状を明確に説明できるような別の（陰謀論に陥らないような）信念を提示する必要がある。さらに、「集団 β から見て集団 γ の信念が明確に説明不能であること」を示すことは集団 γ による集団 β から集団 γ への移行防止につながる。

iii) 集団 γ への介入

集団 γ はその定義より介入が不可能である。集団 γ のコミュニティが集団 α ・ β に働きかけることを防ぐために過激な思想の検閲や過激な行動の取り締まりなどが有用である。一方、このような行動自体が陰謀と見做される場合があり、集団 α ・ β にはこのような介入が適切であることを明確に示す必要がある。

iv) 介入の事例

以上の介入を、「コロナワクチンは製薬会社 X が利益を得るために危険を承知で製造販売しているのだ」と主張する陰謀論集団 γ について適用する。集団 α は「コロナワクチンは危険でない」、集団 β は「コロナワクチンは危険である」と主張しているとしよう。

まず初めに「コロナワクチンは危険でない」と速やかかつ明確に発信し、「コロナワクチンは危険である」といった発言には根拠がない」といった反駁に加え、「接種者は未接種者より死亡率が低いのでワクチンを接種した方がいい」といった科学的な根拠などを同時に提示することが有効であろう。

このような行動は集団 α が集団 β に移行することを阻止できるだけでなく、集団 β の一部に対しても反駁として機能する。それに加え、現実には人気の芸能人や youtuber を商業的に起用するなどの対策により集団 α が「コロナワクチンは安全である」という主張に触れる機会を増やし集団 β への移行を抑制することが試みられた。

集団 β に対してはさらに別の介入も考慮される。「逆に誰にも副作用が出ないようなワクチンは効き目がないのではないか」という新たな理論の提示は、「副作用があるから危険」という考えを持つ集団 β の一部を安心させ拠り所となるかもしれない。「儲けのために製薬会社 X が危険なコロナワクチンを売り出していると主張する人がいるが、その理論に基づけば製薬会社が作る他の薬も全部危険になってしまわないか」と説明することは、集団 β の一部にとって集団 γ の意見が飛躍したものであることを見つけ出し β の状態に留めることに役立つかもしれない（一方で、 β の一部が γ に移行するのをより早めてしまうかもしれない）。また、集団 γ に対しては、過激な思想を監視するだけでなく、他者へ危害を加える場合にはそれを取り締まるといった対策が考えられる。このような対策は集団 γ を抑えるのみならず、集団 $\alpha \cdot \beta$ にとっての一部にとっては集団 γ の行動が理解できなと感じさせるきっかけになる可能性がある。

6. 結論

陰謀論は認知的完結欲求に基づき「信念の形成」「信念の安定化」「陰謀論の萌芽の形成」といった個人のフェーズ移行が、集団内・集団間の情報の流れにより駆動されることで拡大していくことが示された。またこれを踏まえ、陰謀論への介入手段として「リラクゼーションやコミュニケーション

ンなどによる不安・不信感への非認知的な介入」「適切な権威主義、および反証主義や完全性の否定などに接続するような形での上位信念の導入」「公式の立場から、情報および根拠の即座かつ明確な提示」などが考えられた。

7. 問題点と展望

本稿においては、認知的完結欲求の視点からコロナワクチンに関する陰謀論が形成される過程について分析した。陰謀論の形成過程に対し個人内での信念形成というミクロの視点から説明を試みたが、陰謀論は社会的な問題であり、集団間の情報の流れなども大きく影響するためよりマクロな視点での解析も必要であると考えられる。また、認知的完結欲求を一つの絶対的な規則として設定したため、実際に個人内で起こっている現象との乖離が生じている可能性がある。そもそも、陰謀論には様々な種類が存在し、今回のコロナウイルスに関する議論を単純に一般化することはできない。

一方で、今まで明示されてこなかった陰謀論形成過程を体系化し、その体系化を元に陰謀論への抵抗について議論できたことは、現在も形を変えながら人々に影響を及ぼし続ける陰謀論に向き合っていく上での大きな足がかりとなるであろう。

文献

1. West, H. G., & Sanders, T. (2003). *Transparency and conspiracy: Ethnographies of suspicion in the New World Order*. Duke University Press.
2. Vermeule, A., & Sunstein, C. (2009) Conspiracy theories: causes and cures. *Journal of Political Philosophy*, 17(2), 202-227.

3. Oliver, J. E., & Wood, T. (2014). Medical conspiracy theories and health behaviors in the United States. *JAMA Internal Medicine*, 174(5), 817-818.
4. Oliver, J. E., & Wood, T. (2014). Conspiracy Theories and the Paranoid Style(s) of Mass Opinion. *American Journal of Political Science*, 58(4), 952-966.
5. Jolley, D., & Douglas, K.M. (2014). The effects of anti-vaccine conspiracy theories on vaccination intentions. *PLoS ONE*, 9 (2).
6. Bowles, S. (2009). Did warfare among ancestral hunter-gatherers affect the evolution of human social behaviors? *Science*, 324(5932), 1293–1298.
7. Whitson, J. A., & Galinsky, A. D. (2008). Lacking control increases illusory pattern perception. *Science*, 322(5898), 115-117.
8. Tooby, J., & Cosmides, L. (2015). *Conceptual foundations of evolutionary psychology*.
9. Kruglanski, A.W., & Webster, D.M. (1996). Motivated closing of the mind: "seizing" and "freezing". *Psychol Rev*, 103(2),263-283.
10. Marchlewska M., Cichocka A., & Kossowska M. (2017). Addicted to answers: Need for cognitive closure and the endorsement of conspiracy beliefs. *European Journal of Social Psychology*, 48(2), 109-117.
11. Mulukom, V.V., et al. (2022). Antecedents and consequences of COVID-19 conspiracy beliefs: A systematic review. *Soc Sci Med*, 301.
12. Douglas, K. M., et al. *Understanding conspiracy theories. Political Psychology*, 40(Suppl 1), 3-35.
13. Uscinski, J. E., Klofstad, C., & Atkinson, M.D. What drives conspiratorial beliefs? The role of informational cues and predispositions (2016). *Political Research Quarterly*, 69(1), 57-71.
14. Popper, K.R. (1963,1965, 1969, 1972). CONJUNCTURES and REFUTATIONS-The Growth of Scientific Knowledge-. (カール. R ポパー 藤本隆志・石垣壽郎・森博 (訳) (1980) 推測と反駁 —科学的知識の発展— 法政大学出版局)
15. 厚生労働省. (NY). 新型コロナウイルス Q & A. <https://www.cov19-vaccine.mhlw.go.jp/qa/0008.html>
16. Haas E. J. et al. (2021). Impact and effectiveness of mRNA BNT162b2 vaccine against SARS-CoV-2 infections and COVID-19 cases, hospitalisations, and deaths following a nationwide vaccination campaign in Israel: an observational study using national surveillance data. *Lancet*, 397(10287), 1819-1829.
17. Cortina, M., & Liotti, G. (2010). Attachment is about safety and protection, intersubjectivity is about sharing and social understanding: The relationships between attachment and intersubjectivity. *Psychoanalytic Psychology*, 27(4), 410-441.
18. Manzoni, G.M., Pagnini, F., Castelnuovo, G. et al. (2008). Relaxation training for anxiety: a ten-years systematic review with meta-analysis. *BMC Psychiatry*, 8(41).

-
19. Egil, W.M. (2008). Physical activity in the prevention and treatment of anxiety and depression, *Nordic Journal of Psychiatry*, 62(47), 25-29.
20. Meyer, J.C. (2000). Humor as a Double-Edged Sword: Four Functions of Humor in Communication. *Communication Theory*, 10(3), 310-331.
21. Crocker, J., Luhtanen, R., Broadnax, S., & Blaine, B. E. (1999). Belief in U.S. government conspiracies against Blacks among Black and White college students: Powerlessness or system blame? *Personality and Social Psychology Bulletin*, 25(8), 941-953.
22. Jost, J. T., & Banaji, M. R. (1994). The role of stereotyping in system-justification and the production of false consciousness. *British Journal of Social Psychology*, 33(1), 1-27.
23. Whitson, J. A., Galinsky, A. D., & Kay, A. (2015). The emotional roots of conspiratorial perceptions, system justification, and belief in the paranormal. *Journal of Experimental Social Psychology*, 56, 89-95.